

氏 名 伊藤 悟

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1699 号

学位授与の日付 平成26年9月29日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 中国雲南省における徳宏タイ族の即興うたと感性の
民族誌的研究

論文審査委員 主 査 教授 寺田 吉孝
教授 竹沢 尚一郎
准教授 横山 廣子
教授 馬場 雄司 京都文教大学
准教授 米野 みちよ フィリピン大学

論文内容の要旨

Summary of thesis contents

本研究は、即興うたを主な考察対象として、うたを歌い、聴く人びとの、主観と客観が共存する体験に着目し、即興うたの実践に関する民族誌的記述から、徳宏タイ族が育んできた文化的な感性を明らかにする。

即興うたは中国西南部に広く見られる伝統文化の一つであり、生活の基本技能として身につけられ、娯楽や恋愛をはじめ、様々な社会的場面において歌われるものであった。徳宏タイ社会では、現代化により若者に即興うたの技法と実践感覚は継承されなくなり、伝承の危機に瀕しているが、他方で、民間において職能化することで新たな社会的文脈を獲得して実践されるようになった。本研究は主に新旧 2 種類の職能者、すなわちシャマン的宗教職能者と近年登場した民間職能歌手の活動を中心に考察する。

第 1 章では先行研究を踏まえ、本研究がうたのテキストや音楽の形式や構造を論じるのではなく、また、実践をめぐって人びとが言語化する解釈や意味について論じるのでもなく、主観と客観を交渉しながらうたを歌い聴く実践について考察することを述べる。

第 2 章と第 3 章では、本研究の対象である徳宏タイ族とその社会と宗教について概説する。まず第 2 章では、村落社会の組織構造について概観し、家族や親戚そして友人、村落共同体といった社会関係のなかで志向される平等主義的価値観が他人と同じであろうとするコン・ブーンという心理にもとづくことを指摘する。

徳宏タイ社会における即興うたの実践とその体験は、霊的存在や魂をめぐる宗教的世界観と深く結びついている。よって、第 3 章では、上座仏教と精霊信仰、そしてシャマニズムを概観し、人びとの体験を宗教的経験として解釈する「肉体一魂」という認識的枠組を素描する。この枠組は即興うたの体験や評価を言語化する際にも用いられる。

第 4 章以降は即興うたに関する民族誌的記述と考察を行う。

まず第 4 章で、徳宏タイ族の即興の掛け合いうた、カーム・マークを取り上げ、その詩的表現技法についてローカル概念のラム・カームとゴップ・ガイーを導きの糸として分析し、歌い手たちが「いま—ここ」において詩的技法を駆使する実践感覚を考察する。ここでは、即興うたの事例を、客観的構造や規則の分析のためにテキストとして書き留められうるものとみなすのではなく、人と人のコミュニケーションのあいだから生起する出来事と見なす視座をとる。これにより、歌い手と聴衆が真と偽、現実と虚構の価値判断を曖昧化する共犯関係を結ぶなかで、うたを実践する協働性が、忘我的快感覚カオ・ザウという感性的体験をもたらすことを指摘する。

第 5 章と第 6 章では、シャマン的宗教職能者ヤーモットの即興うたについて、死者の魂をピー（霊）へと変態させ、霊界へ送り届ける送霊儀礼、ソンコーカオの事例から検討する。

第 5 章では、ヤーモットが儀礼遂行のために用いる即興うたの表現技法の特徴を分析する。まず、雲南の少数民族社会には、死者の魂を祖霊の故郷へと帰す「送魂」の儀礼が広く見られることを確認したうえで、徳宏タイ社会には仏教儀礼において経典テキストを朗誦することで一方的に魂に働きかける方法と、シャマン的宗教職能者ヤーモットが、自分の守護霊が死者を諭しながら霊界へと導く様子を即興うたで中継して聴衆に聴かせる方法とがあることを述べる。その上で、ヤーモットの中継うたが聴衆の間接的な参与によって展開するその構造と、ヤーモットのうたの一人多役的な表現技法を明らかにする。

第 6 章は、ソンコーカオの儀礼場に出現する、ヤーモットの即興うたと聴衆の参与が

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

くりだす、現実世界と霊的次元が曖昧化した時空間について考察する。ここでは、徳宏タイ族の世界観を構成するモノに宿る霊性ミンと、うたを聴くことで抜け出した聴衆の魂が、儀礼場とうたの空間を往来する様子と、その動きを受容する人びとの文化的感覚について論じ、また、儀礼に参加することで起こる感性的体験について明らかにする。

第7章は、現代社会における即興うたの新たな展開について、うたの民間職能歌手の登場とその実践形態、そして聴衆の体験の変化を考察する。現代化のなかで、村落社会の生活は大きく変化し、生活のなかに根づいていた即興うたは若者たちに歌われなくなった。しかし、新たに登場したうたの民間職能者は、仏教儀礼など祝祭の場でパフォーマンスを行うようになり、その活動を記録した映像メディアがローカル市場で流通することにより、洗練されたうたが広く聴かれるようになった。この過程を即興うたの職能化に貢献したワン・シャンヤーのライフヒストリーから概観し、さらに彼女らが考案したパフォーマンスが仏教儀礼など祝祭の場に受容されて上演されるようになった理由と、どのような実践形態が儀礼主催者たちに歓迎され、人びとにこれまでとは異なる質の宗教的体験をもたらしたのか、明らかにする。

以上の各章での議論を踏まえ、本論文の結論は、以下の通りである。徳宏タイ族の即興うたは、一見して自由な「雰囲気」のなかでお互いの心情やイメージを交換しつつ出来事を創り出しているように見える。しかし、うたの実践の文脈は仏教儀礼やシャマニズムの儀礼に限られており、そこでの体験は宗教的目的や価値観において方向づけられている。うたの実践の時空における人びとの感性的体験は、日常生活を通して身に付けられる徳宏タイ族のあるべき振る舞い方や宗教観を土台としつつ、人びとを包み込む「雰囲気」をも含む種々のその場の状況に大きく依存しつつ引き起こされている。よって、彼らの即興うたは、「いまーここ」における他者との協働によって、その都度「わたし」が生きて在る世界との関係性を、その文脈に即した価値観によって秩序化して、世界に対する理解を拡張する技法であると言える。

本研究は、即興うたを楽しみ、また創出する文化的感性について、実践がもたらす体験から明らかにしたが、即興うたには詩的技法にもとづく言語行為としての側面があり、それを研究するには、今後、様々な文脈において歌われたテキストを分析する必要がある。これにより即興うたが表現する徳宏タイ族の感性をより具体的に明らかにできると考える。

Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、中国雲南省徳宏タイ族ジンポー族自治州に居住するタイ族の即興うたについて、人びとの感覚・感性的側面に着目し、うたをめぐって参与者間に展開する状況を多面的に分析・考察するとともに、感覚や主観的イメージを対象とする人類学的方法論の可能性を追求した意欲的研究である。即興うたは、西南中国から東南アジアにかけて、かつては広く見られたが、社会変化とともに衰退の一途をたどっている。徳宏州のタイ族においても消滅の危機に瀕してはいるが、現在の中高年以上は、まだ即興うたが歌える世代であり、本研究は、うたの現場で数多く積み重ねられた詳細な観察と記録に基づいている。

本論文は、序論と結論を含めて8章で構成される。

第1章では感覚人類学、民族音楽学、徳宏タイ族研究の領域における先行研究を検討し、従来の即興うたの研究の多くが歌詞や旋律、音階構造などを分析してきたのに対し、本研究は、感性的コミュニケーションとして即興うたを論じるものであると位置づける。うたの実践の場で、人びとが感覚を通じて関係をいかに交渉するのか、うたが人びとにどのような体験をもたらし、どのように社会的に共有される経験となるのか、場の雰囲気とタイ族社会の文脈に注意を払いつつ考察することが表明される。

第2章では徳宏タイ族社会の特徴、第3章では宗教的世界観や信仰活動について述べた後、第4章以下では、3種類の即興うた（掛け合いうた、送霊儀礼におけるシャマン的宗教職能者のうた、仏教寄進儀礼における民間職能歌手のうた）を対象に、それぞれ異なる目的を持って歌われるうたに即して、歌われる時空、うたに用いられる技法、うたそのものとその場の雰囲気の展開によって人びとの間に生起する感性的反応が描写され、考察される。

第4章は、掛け合いうたの基本的なうたの技法と、うたがもたらす「快体験（カオ・ザウ）」について論じる。掛け合いうたは、かつては労働や祭りなどの場で、頻繁かつ広範に人びとに愛好され、また結婚相手を見つけるプロセスで誰もが青年時代に掛け合いの経験を重ね、即興うたの基本的技を身に付けた。その考察を通して、タイ族がうたを評価する2つの基準、つまり日常的言語とは異なる語彙や慣用句などの言語表現を用いて歌う能力（ラム・カーム）と、押韻、類義語の並列などにより語と語の間、句と句の間に「橋を架ける」技法（ゴップ・ガーイ）が抽出される。それらが備わり、さらに場を包み込む雰囲気が合致した時、うたが心に入り、情動が揺さぶられるカオ・ザウがもたらされる。

第5章ならびに6章は、死者の霊魂を霊界に送り、祖霊化させて生者との間に互恵的な関係を結ぶ目的で執り行われる送霊儀礼と、その場で宗教的職能者によって歌われる即興うたを考察する。うたは、死者や職能者の守護霊、祖霊など歌う主体が多数入れ替わる語りと状況説明とで構成され、実況中継するかのようになり、参加者に死者の旅のイメージを形づくる。五感を総動員させ、儀礼の場と日常的には不可知の霊界との架橋を実現させる。この場で人びとは忘我の境地としてカオ・ザウを体験する。

第7章では、掛け合いうたを歌わず、解さない若年世代が増加する近年、即興うたを職能化した民間歌手が出現した過程と、彼らが仏教儀礼の伝統的枠組みを拡張して生み出した新たな即興うたのあり方が論じられる。歌手によるうたのパフォーマンスは、その場に一体化した雰囲気が生まれた時、人びとにカオ・ザウをもたらし、祝福と称賛の宗教的体験として評価されることが指摘される。

最終章の第8章では、即興うたを身体性に根ざして体験される感性的コミュニケーションの文化的技法として明らかにした本論文の主要な論点を総括するとともに、今後の課題

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)

について述べる。

本論文の学術的意義は次の点にある。

1) 長期にわたる現地調査を通して得られた、厚みのあるデータに基づき、即興うたを中心として徳宏タイ族の文化と社会を詳細に描いた優れた民族誌である。

2) 中国雲南省徳宏州のタイ族の即興うたについて、旋律構造の音楽学的分析や言語声調との関係の指摘がなされていた従来の研究水準を、うたの技法に関する分析を一段と深化させるとともに、うたわれる場の情緒的な雰囲気と関係を持ちつつ展開する人びとの感性的体験を、タイ族の文化や社会の文脈と関連づけながら解明し、大きく進展させた。

3) 現地調査における一般的な観察と聞き取りに加え、多面的な方法を用い、方法論的可能性を開いた。具体的には、第一に、調査者がうたに関わる文字、占い、竹細工、機織り、楽器などの知識と技術の習得を試み、その学習過程での自身の身体化のプロセスと、タイ族の実践感覚とのすり合わせを行うことで、彼らの感覚的な世界理解の仕方を再現することに成功している。第二に、タイ族の即興うたの実践を映像や音に記録し、それを人びとともに視聴しつつ、質問と説明を繰り返すことで、第三者には把握が困難な彼らの世界観や宗教観を彼らの視点に沿って記述することが可能になっている。第三に、本論文の論述と相互補完的であり、かつ完成度の高い映像作品を2本制作し提出したことで、文字と映像からなる新たな民族誌作成の方法を示唆している。

4) 世界的に衰退が著しい即興うたの文化に関して、地域の枠に留まらない、貴重な研究成果である。

他方、本論文には全く問題がないわけではない。たとえば、第2章と第3章において徳宏タイ族の社会組織や宗教体系がやや単純化されて説明されており、第7章では徳宏タイ族の社会変化が静態的に描かれる傾向がある。また、職能歌手の出現後、新たなメディアとして登場したDVDと徳宏の人びとや社会との関係についてより詳細な考察が望まれる。しかし、これらの点は、本論文がもつ高い資料的価値と学術的意義を損なうものではなく、今後研究をさらに発展させる際に留意すべき課題である。

以上のように、長期間にわたる多面的な調査研究を通して多くの貴重なデータを収集し、即興うたについて従来の研究にはない独創的視点で、分析と議論を展開した本論文の学術的意義は極めて高く、博士の学位を授与するに値すると、審査員全員一致で、判断した。